

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	篠原 郁子
論文題目	母親が持つ「子どもの心に目を向ける傾向」と子どもの心の理解能力の発達 — 生後5年間の縦断的検討 —		
(論文内容の要旨)			
<p>乳児と養育者のやりとりでは、養育者が乳児の感情や意図に言及する様子がしばしば観察される。乳児は言葉による表出ができないため、養育者が乳児の心の状態を言語化しているとも考えられる。しかし養育者は、乳児の状態を単純に言語化するというよりもむしろ、乳児の行為が大人と同様に意図や感情を伴うものであると想像し、意味を付与しながら関わっている可能性がある。「乳児の心に目を向け、乳児が心を持った存在であるとみなす傾向」はこれまで mind-mindedness (Meins, 1997; 以下MM) と呼ばれてきた。</p> <p>本論は、こうした養育者による乳児への「心の帰属」という特徴に着目し、その特徴が子どもの発達、特に自他の内的状態の理解の発達に及ぼす影響を生後5年間に亘って長期縦断的に検討したものである。</p> <p>本論の主な目的は以下の3点である。</p> <p>第1の目的は、母親によって乳児に心を帰属しようとする傾向 (MM) に個人差が存在すると予想し、それを検証することであった。</p> <p>新たに考案されたMM測定実験では、複数の母親に自分の子どもではない共通の乳児ビデオ刺激を呈示し、ビデオの乳児が如何なる意図や感情、思考を持つと思うかが質問された。</p> <p>生後6か月児の母親 (38名) の測定結果から、多くの母親が確かに、乳児の動作や視線に内的状態を読み込む様子が認められた。ただし、同一刺激を用いたにもかかわらず、乳児の内的状態の回答数 (MM得点) には母親間にばらつきが認められた。乳児の内的状態はそれを見る者から多様に解釈されること、その解釈の量的豊富さには母親間で個人差があることが示唆された。</p> <p>第2の目的は、母親のMMが、子どもへの実際の養育行動と関連を持つのかを明らかにすることであった。生後6か月時にMM測定実験に参加した母親とその子どもを対象に、生後6、9、18、24、36か月時に母子観察が実施され、先に測定した母親のMMと母親の養育行動との関連について縦断的検討が行われた。</p>			

生後6か月時の観察結果から、高いMM得点を持つ母親は、我が子の視線を追従し、子どもと注意を共有したやり取りを多く行うことが見出された。さらにMM得点は、5回全ての観察時期において、母親が我が子の内的状態について発話する頻度と相関していた。高いMMを持つ母親の子どもは、生後早期から、心的語彙への豊富な接触経験を持つと考えられた。

第3の目的は、母親が乳児に心を付与するMMは、やがて子ども自身が心的世界を持つようになること、更には子どもが他者と交流し、他者の内的状態を理解するようになることの発達を促進するだろうという仮説の検討であった。

MMを測定した母親の子どもの縦断調査により、自他の「心の理解」に関する課題が実施された。母親のMM得点の高さは、生後18か月時における他者の指差し理解能力と心的語彙の理解能力と関連していた。

その後、母親のMM得点が48か月時の感情理解能力、一般語彙能力の高さと関連することも認められた。しかし、36か月時の他者の欲求理解、48か月時の誤信念理解について、MM得点が高程度の母親の子どもの成績が、高いMM得点を持つ母親の子どもよりも優れることが示された。

縦断研究を総括すると、次の知見が得られた。母親のMM得点が子どもへの心的語彙の付与行動を介して、子どもの感情語の理解(18か月時)や表情命名能力(48か月時)に寄与することが確認された。部分的ではあるが、母親による乳児への心の帰属が養育行動にバイアスを与え、養育環境の特徴を通して子どもが心という存在に気付き、命名する能力の発達を促進するプロセスが示唆された。

ただし、MM得点の高さという乳児への心的帰属の量的豊富さは、一方では過剰さを含み、必ずしも内容としての正確さや文脈上の適切性を備えたものではない可能性も考えられる。このため、MMの単純な高さのみでは、子どもが他者の視点に立って、他者の欲求や信念の内容を正確に推測するという能力の発達を促進し得なかったのではないかと考察され、新たな課題も示された。

全体として乳児期から幼児期に亘る縦断的検討により、母親がつい何気なく行う乳児への心の帰属が、子ども側の心の理解能力の発達に持つ影響とその範囲を示す知見が得られた。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、おもに次の4つの観点から見て大変優れた研究と認められ、高い評価を得た。

1) 新しい重要なテーマを扱う斬新な研究であること。

養育者(あるいは母親)は、乳児が実際に心や感情をどの程度もっているか、あるいはそれらを母親に向かって表現しているかどうかにかかわらず、乳児が0歳のうちから心をもつ存在と扱い、乳児の心を読み取ろうとする傾向(mind-mindedness, MM)をもつ。

このような母親の傾向は、子どもの発達をうながす要因のひとつと考えられる。本論文は、今まで日常的には観察されていた上記のような母親の傾向(MM)が本当にあるといえるのかどうかを確かめ、実証科学のテーマとして本格的に扱った研究である。

また、従来の愛着や母子相互作用の研究は、どちらかというとも子どもの行動のほうに焦点を当てて観察されてきた。本論文では、母親の側に重心を移し、母親が子どもに向かう心的傾向の個人差と母親のインタラクションのつくり方に焦点をあてたところが新しい視点である。

2) 新しいオリジナルな測定方法を開発したこと。

母親のMMをどのように測定するかは、実証的研究をするためには大きな問題となる。本論文では、複数の母親に自分の子どもではない共通の乳児ビデオ刺激を呈示し、ビデオの乳児が如何なる意図や感情、思考を持つと思うかを質問して、MMを測定する新しい方法を開発した。

6か月の乳児をもつ母親のMMを調べた結果、乳児の内的状態はそれを見る者から多様に解釈されること、その解釈の量的豊富さには母親間で個人差があることがわかった。

3) 生後6か月から48か月という長期にわたる縦断研究によって、高いMM得点を持つ母親と子どもの行動との関連を見いだしたこと。

本研究が特筆されるのは、長期の縦断研究を行い、VTRで撮影した多様な行動観察データを蓄積して検討したことである。発達心理学研究では、縦断データの重要性は多く指摘されてきたが、膨大な時間と労力がかかるので困難である。

(続紙 4)

本研究では、生後6か月時にMM測定実験に参加した母親とその子どもを対象に、生後6、9、18、24、36か月時に母子観察を実施し、母親のMMと母親の養育行動との関連について縦断的検討を行った。

生後6か月時の観察結果から、高いMM得点を持つ母親は、我が子の視線を追従し、子どもと注意を共有したやり取りを多く行うことが見出された。さらにMM得点は、5回全ての観察時期において、母親が我が子の内的状態について発話する頻度と相関していた。高いMMを持つ母親の子どもは、生後早期から、心的語彙への豊富な接触経験を持つと考えられた。

また、母親のMM得点が子どもへの心的語彙の付与行動を介して、子どもの感情語の理解(18か月時)や表情命名能力(48か月時)に寄与することが確認された。部分的ではあるが、母親による乳児への心の帰属が養育行動にバイアスを与え、養育環境の特徴を通して子どもが心という存在に気づき、命名する能力の発達を促進するプロセスが示唆された。

4) 膨大な縦断研究のデータをまとめ、論文構成も優れていること。

縦断研究で集められた観察データは膨大であり、また多様な結果が混在することになり、まとめるのは容易ではない。それらを丁寧に読み解くとともに、博士論文として構成する作業も良く行われており、大変な労作と認められた。

ただし、「MMとは何なのか」についての本質的な議論は、まだ必要である。たとえば、「おしゃべりな母は静かな母に比べてMMが高くなるのではないか」「MMが高いことはプラスだけではなくマイナスの影響もあるかもしれない」などの疑問が出された。また、今後の課題として、子どもの言語活動との関連を調べるには、子どもの心に一方向的に心的傾向を認めるだけではなく、子どもが必要なときに必要なタイミングで働きかけができる母親を調べる必要があるのではないかという議論もなされた。

しかし、これらの問題は、今後の研究の発展にかかわるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年2月16日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降